

## 武蔵野日曜集会

## 三位一体の神

## ——ヨハネ伝第14章1～17節他——

1993年2月14日

小池辰雄

神は靈的人格的存在 根源現実<sup>1</sup>は絶対次元 四位一体 永遠の生命を嗣ぐためには 絶対の受け身 われは道なり真理なり生命なり キリストを生きる

## 【ヨハネ14・1～19】

1 『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2 わが父の家には住処<sup>すみか</sup>おとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処<sup>ところ</sup>を備えに往く。3 もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4 汝らは我が往くところに至る道を知る』5 トマス言う『主よ、何処<sup>いすこ</sup>にゆき給うかを知らず、争<sup>い</sup>でその道を知らんや』6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理<sup>まこと</sup>なり、生命<sup>いのち</sup>なり、我に由らでは誰にても父の御許<sup>みもと</sup>にいたる者なし。7 汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』8 ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』9 イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕<sup>とも</sup>に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は己によりて語るにあらず、父われに在<sup>いま</sup>して御業<sup>みわざ</sup>をおこない給うなり。11 わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業<sup>わざ</sup>によりて信ぜよ。12 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14 何事<sup>なにごと</sup>にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15 汝等もし我を愛せば、我が誠命<sup>いましめ</sup>を守らん。16 われ父に請わん、父は他に助主<sup>たすけぬし</sup>をあたえて、永遠に汝らと偕<sup>とも</sup>に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊<sup>みたま</sup>なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕<sup>とも</sup>に居り、また汝らの中に居給うべければなり。



## ●神は靈的人格的存在

「三位一体の神」なんていう珍しい題を出しましたが、私の『曠野の愛』というガリ版刷の雑誌の第1号（1951年1月）の最初の題目がこの「三位一体の神」なんです。その時に書いたのは、今はもう感心しませんが、それを大分直して、著作集第三巻『無の神学』（1982年刊）の第五章に載せてある。神学なんていうと、何か皆さん、読みたくないような気持になるかも知れませんが、私のはいわゆる論理的な神学ではないですから、また時にお読みください。

ヨハネ伝の第14章にはいります。

1 『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2 わが父の家には住処<sup>すみか</sup>おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処<sup>ところ</sup>を備えに往く。3 もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4 汝らは我が往くところに至る道を知る』5 トマス言う『主よ、何処<sup>いずこ</sup>にゆき給うかを知らず、争<sup>い</sup>でその道を知らんや』6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理<sup>まこと</sup>なり、生命<sup>いのち</sup>なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。7 汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』8 ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』9 イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は己によりて語るにあらず、父われに在<sup>いま</sup>して御業<sup>みわざ</sup>をおこない給うなり。

イエスは神様のことを「父」という。大体、神様は分からんです、靈ですから。何も、お髯をはやした人間を想像するわけではない。キリストの言葉に、

「24 神は靈なれば、拜する者も靈と真<sup>まこと</sup>をもつて拜せよ。」（ヨハネ4・24）

とある。靈的存在、これは目にも見えない。宇宙の大靈みたいなもの、それをキリストは「父」と言っている。イザヤ書の63章15～16節に、

「15 ねがわくは天より俯視<sup>ふしみそ</sup>なわし、その栄光あるきよき居所<sup>すみか</sup>より見たまえ、なんじの熱心<sup>いっくしみ</sup>となんじの大能<sup>ちから</sup>あるみわざとは今いずこにありや。なんじの切なる仁慈<sup>あわれみ</sup>と憐憫<sup>あわれみ</sup>とはおさえられて我にあらわれず。16 汝はわれらの父なり。アブラハムわれらを知らずイスラエルわれらを認めず。されどエホバよ汝はわれらの父なり。上古<sup>いにしえ</sup>よりなんじの名をわれらの贖<sup>あがないぬし</sup>主<sup>あがなひぬし</sup>といえり。」（イザヤ63・15～16）

ここに「父」という言葉が出ている。これは第三イザヤです。それから、64章8節にも、「されどエホバよ汝はわれらの父なり。われらは泥塊<sup>つちくれ</sup>にしてなんじは陶工<sup>すえつくり</sup>な



り。我らは皆なんじの御手のわざなり。」(イザヤ64・8)  
第三イザヤは特に神様のことを

「父」

と呼んでいる。霊的な存在を人格的な言葉で表現する。

「神、かく言い給う……」

というわけです。旧約から新約に至るまで、神様は霊的人格的存在なんです。その人格的というところを何で表現するかというと、「父」という言葉で表現する。だから、父という言葉も一種の暗号です。これはお伽話ではないから。人間の一家のより頼むところは父親というわけです。

宗教の世界は霊の世界です。けれども、霊の世界を具体的に表現するときに、父といったり、母といったり、姉といったり、妹といったりする。人間の普通の現実の言葉でもって言いあらわす。言い表されたものは、普通の現実の言葉だけれども、それは全部霊的な内容なんです。そこは間違わないようにしてください。父と言ったって、これは霊的なもの、正に霊父なんです。イエスはいつも祈るときには、

「父よ!」

ですから。「神よ」よりも、むしろ「父よ」という方が親しい。

### ●根源現実とは絶対次元

神は無相です。相が無い。霊的なものを具体的な相対的な言い方をするが、それは根源的な現実なんです。言いようがないから仕方がない。三位一体の神は霊である。その霊なる神を表現するのに「父」という。キリストは特別な唯だ独りの存在ですから、「子」ということになる。それで、非常に信頼してものを言ってらっしゃるわけです。しかし、その内容は完全に霊的なんです。

12歳のイエスが、<sup>すぎこし</sup>過越の祭のときにエルサレムにお父さんとお母さんと一緒に出てきて、そして、神殿の坊さんたちと問答していて帰らない。ヨセフとマリヤは、イエスがやってこないから戻ってきた。そしたら、

「私はお父さんのところに居るのに、なぜ、あなた方は尋ねにきたか」

と言った。12歳のキリストは神様のことを「父」と言った。肉の父のヨセフを問題にしない。そういう12歳のキリストは正に

「言い逆らいの徴」

そのものです。

本当の現実では、いい加減な現実に対しては言い逆らいだ。我々クリスチャンも、日常生活の中でも、そのような自覚が非常に大切です。単なる自覚ではなく、根源現実です。相対的な現実に対して、根源の現実です。本当に魂が根源現実を生きている。根源現実とは



別な言葉でいうと、高次元です。次元が違う。あるいは、絶対次元といってもいい。絶対次元の中に自分の魂は入っている。

そうしたら、日常生活のいろいろな事がゴタゴタ起きますけれども、それに決してふりまわされない。これが、キリスト者の本当の現実には根源現実だということです。相対的現実とはもうひとつ次元が異なり、質がちがう。我々は、その根源現実の中に生きています。これは普通のひとには分からない。御霊を持たないと分からない。「三位一体」の聖霊を宿すと、この根源現実が本ものになる。聖霊を宿さなければ、「根源現実」なんて言ったって、それは観念にすぎない。根源現実で我々の魂は聖霊と連なっている。

### ●四位一体

ヨハネ伝14章、15章は大事なところですよ。

「我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。」(ヨハネ15・5)

即ち、我々はキリストに連なっているところの存在です。キリストと生命が一つにしてある存在。キリストと生命を一つにするということも、結局、媒介するものは聖霊です。普通のクリスチャンは「聖霊」とは言わない。ただ「信仰」と言っている。

「信仰においてキリストと一つとなる」

という表現も悪くはないけれども、「キリストと一つ」というときには、聖霊が媒介になつていなければ、「キリストと一つ」とは本当の意味ではなっていないわけです。それでは、思われている世界、心でただ感ずるだけの世界です。

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」(ロマ8・9)

と、パウロが言った。その聖霊が媒介となつて、そしてキリストと一つである。

「我れキリストのうちに」

というのは、御霊の媒介がなければ、「我れキリストのうちに」とは本当は言えない。そうすると、

「神―キリスト―聖霊―我―」

という四位一体なんだ。「三位一体」というものは、

「神―キリスト―聖霊」

でしょ。そして、自分が本当にそこに一つになるとときには、この四位一体にならなければ、本当のキリスト者の現実ではないわけです。

「神・キリスト・聖霊は一つで、ちゃんと三位一体だなあ」

なんて思ったってしょうがないんだ、自分がその中に入っていかなければ。そうすると、四位一体となる。パウロが言った、

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

ということの内容は四位一体ということです。ただ



「信仰、信仰」

なんて言ってたってダメなんだ。

「本当に四位一体の現実か」

ということだ。

聖霊は十字架が土台です。十字架で贖われてしまった。自分はすっ飛んでしまった。相対的な人間小池はゴタゴタ生きてます。けれども、それは本当の意味では、根源現実では、居ないようなやつです。そして、そこに十字架・聖霊にあるところの存在が与えられている。十字架と聖霊は離すことができない。これをはつきり言う人があまりいない。

聖霊が聖霊であるためには、土台が十字架です。十字架が本ものであるときには、必ず聖霊がくる。これは離すことができない。これがしつかり一如の関係になっていけば、もう決して動かされない。

「聖霊、聖霊」

とって十字架がいい加減になっていると危ない。ヘタするとサタンに足をすくわれて悪霊に、傲慢な霊になってしまう。

「私は聖霊を宿しているから」

なんて、いい気になっていたら、とんでもない。聖霊は来たり宿りたもうのであって、こっちは受け身だから。

●永遠の生命を嗣ぐためには

マルコ伝の10章に、

「イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪つきて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか』」

と。質問はいいんだよな、

「永遠の生命を嗣ぐためにはどうしたらいいか？」

という実存問題です。キリストは何と答えたかというところ、

イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。』」

(マルコ10・17、18)

神様だけが善である。神様は絶対善ですから。

「神の他に善いものはない、自分は無善である」

と。神様だけが善い。彼は自分を無にしている。無善である。そして、神の前に平伏しているから、今度は、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えた。

「自分は何者でもない」



と言う人が今度は、

「私を見た者は父を見た」

と言う。ということは、善が、神が、完全にキリストの中に入ってしまった。正に神人なんだ、神の人だ。本当にキリストの人に、キリスト者になるためには、こっちはゼロにならなければ。ところが、人間はゼロになれない。しかし、十字架でもつてゼロにされた。無我、私の無き人にされた。自我は十字架ですつとんでしまった。だから、今度は私たちは、

「私の中にあるキリストが見えないか」

と言えなければ。まさか、キリストみたいにな

「我を見し者は父を見しなり」

と言われたように、

「我を見し者はキリストを見しなり」

とは、我々は言えない。言えないけれども、

「わがうちなるキリストが見えませんか」

ということと言える。

「私は破れ器だけれども、この破れ器の中に金剛石みたいなキリストがいたもう。

それが見えませんか」

とは言えるわけです。

だから、我々は普通の人とは違って、力がある、光がある、元気があ、生命がある。それはそうだよ。その光であり、力であり、生命であり、智慧であるものは聖霊ですから。うちなるキリストとは聖霊のことだから。聖霊なるキリストです。天界のキリストが一人ひとりの中に入って来はしない。天界のキリストは一人ひとりの中に聖霊として入ってくる。これは宗教の神秘ですから、仕方がない。

宗教の世界は本当の意味で神秘なんです。相対的現実では分からない。月の光が、太陽の光が、たくさんの葉末の露に宿るのと同じことだ。朝、木の葉の露に太陽の光が当たると、七色に光るね。ああいうわけだ。

### ●絶対の受け身

だから、我々は絶対の受け身です。キリストは絶対の受け身のひとだった。

「私はひとつも善くはない。神だけが善い」

と言ったキリストが、

「私を見た者は神を見た」

と言う。絶対矛盾の自己同一ということですよ。

「煩惱即菩提」

という言葉がある。あの「即」の字は大事な字です。数学的な即ではない。これは逆説的



なひつくり返りの字なんです。煩惱は即菩提である。

「罪びとが即義人である」

という。これはルッターの言葉です。

「罪びとと義人がひとつだ」

という。それはキリストによって義とされたから、贖われて、義を賜ったから。

ヨハネ伝の14章、15章でもって、

「私に連なっているなら」

とあるが、どうやって連なるかという点、聖霊の媒介で連なるんです。聖霊の媒介なしにキリストと一つとなろうとしたってダメだ。しかし、その聖霊の媒介はわけではない。十字架を本当に受けとれば聖霊はやってくるから。十字架が観念だと、聖霊がやってこない。

「我れキリストとともに十字架せられたり。もはや、我れ生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」

とある。この

「キリストわがうちに」

とは何ですか。聖霊のキリストです。パウロのあの告白はその通りです。十字架をものすごく言ったパウロは、また聖霊をものすごく力強く言っている。パウロでは十字架と聖霊は離すことができない。「パウロ、パウロ」なんて、皆言っているけれども、

「本当にパウロの現実が分かっているか」

と言いたい。ヨハネはあまり「十字架」とは言わない。直結的な言い方を。しかし、ヨハネを間違えては困るけれども。

「我々の罪を背負ってくれた羔羊」

という言い方をしている。ヨハネは割合に直線的なんだ。パウロは非常なカーブをしている。だから、見えない神様を「父」と言っている。表現は「父」であっても、もちろん霊的な父です。神様のことを「父」なんて言うものだから、仏教の人たちは

「宇宙の大霊を父なんて言うのは、キリスト教はお伽話だ」

なんて言う。お伽話みたいな表現をして、実は霊的な現実を告白しているだけのはなしです。イソップ物語と似ている。そうすると、我々は非常に自由に、くっつくなく把まえることができるし、表現することができる。理屈の世界ではないから。

ピアノやオルガンは音だね。音を聞きながら、それがひとつのリズムになる。音を聞きながら、音の中に歌をみる。歌わなくても、歌をうたっている。それでやりきれなくなつて、ベートーベン第九シンフォニーで、しまいに歌をうたいたければいい。

旧約では、神様のことを「夫」にして、イスラエルの民のことを「妻」にしている。夫妻の関係で言っているところもある。これもイザヤ書の中にある。

それで、「三位一体」と、ただ言ったってしょうがないので、三位一体が私たちにいかに



関わるかとなると、これが「四位一体」です。四位一体にならないければ、本当の関わりを知らないことになる。

「神・キリスト・聖霊で二位一体である」

なんて言ってみたってしようがない。

「私もその中に入って四位一体ですよ」

と言わなければ。入れられてしまったんだ。「十字架・聖霊」で入れられてしまった。だから、我々の告白は三位一体ではなく、四位一体です。四位一体を本当に告白できなければ、三位一体をいくら言ってみたって、本当の意味で三位一体も実は観念になってしまっている。

●われは道なり、真理なり、生命なり

ヨハネ伝14章にもどります。

4 汝らは我が往くところに至る道を知る』<sup>5</sup> トマス言う『主よ、何処どこにゆき給うかを知らず、争いでその道を知らんや』<sup>6</sup> イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許みもとにいたる者なし。

「われは道なり、真理なり、生命なり」

これはそれぞれ定冠詞がついている。「父」にも定冠詞がついている。

「われこそは道なり、真理なり、生命なり」

ということ。

「他に道はないよ。誰でも父のもとに行くことができない、もしも私を通さなければ。私がその道だから、私を通らなければ父のところに行けない。神様を本当につかもうと思つたら、神様のところに本当に行こうと思つたら、私という道を通りなさい」

ということ。そうでなくて、「神、神」なんて言つたつてしようがない。

「われこそは道なり。われこそは真理なり。われこそは生命なり」

とはつきり、キリストが言えるのは、自分が空っぽだから、

「私は神様の道、神様からの道であり、神様への道である」

ということ。そういうことは書いてないけれども、全くその通りです。神からの道の方が先です。そして神への道です。

「神様を現しているのは私の他にないから、私は道であり生命であり真理である」

ということ。

「神の真理は何ぞや?」

と言つたら、

「キリストを見よ」

と、これが神の真理の具体性です。



「神の真理は何だ？」

といつたら、説明は要らない。

「マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を見る」

と。それでおしまい。これは神様の真理の具体的表現である。何といつたつて、全聖書の中心は福音書です。神様を体現しているところのキリストです。

### ●キリストを生きる

だから、福音書はいくら読んでも飽きない。飽きないどころでない。読めば読むほど力がくる。福音書を読んで、頭で

「もうこれは知っているよ」

ではダメなんです。

「キリストを知る」ということは具体的に常に新たにキリストに交わることです。

「これで知ることはおしまい」

なんていうおしまいはない。限りない。無量なんです。無限無量の神様をキリストは表現するから、無限無量なるキリストを我々が受けとると、こっちも質的に無限無量になる。このようにキリストを捕まえているのは、普通のクリスチャンにはいませんよ。箇条的に信じたつて何になるか。

信ずることは実はキリストを生きることです。

「キリストに在りて」

ということとは、もうひとつ大胆にいうと、

「キリストを生きる」

ということですよ。

「わが生命はキリストなり」

ということ。

8. ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』

まあ、言いそうなことだよな。

9. イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。

我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。

「我を見し者は父を見しなり」

と、ここではつきり言っている。

「私を見た者は神様を見たのだ。こんなに長く居たのに何を見ていたか。キリ

ストにおいて神を見ない者は、何を、私を見ているか」

このピリポとの問答は非常におもしろい。

「私にキリストを見せろ」



と言ったら、

「私がこんなキリストを現しているのが分からないかと、それだけの自身をもってあなた方は言わなければ。」

10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいう言は已によりて語るにあらず、父われに在<sup>いま</sup>して御業<sup>みわざ</sup>をおこない給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。

「私の業は、いろいろな病を癒したり、死人まで甦えさせたりした。これはみな神様の力だぞ。私と同じようにお前たちがなるために、助け主を与えるぞ。」

と。キリストは自分の力でやっているとは絶対に言わない。

「神様の力だぞ。」

と。

16 われ父に請わん、父は他に助主<sup>たすけぬし</sup>をあたえて、永遠に汝らと偕<sup>とも</sup>に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

これは具体的な真理です。

「私から出ている御霊、私と同じ聖霊なんだ」

と。「真理」という言葉は、すぐ観念的にとるから、観念的な読み方はしないように。

イザヤ書の63章、64章とヨハネ伝の14章、15章、マルコ伝の10章が中心でありました。それで結局、結論は「三位一体」ではなくて、「四位一体」であるということです。

